

エクステンジリングス

甘木数彦

第一章

二

夫婦が泣いているのを、宇部永一は黙って見ていた。言葉が出ない。励ますなり慰めるなりすればいいのだろうし、そういう言葉をかけたところで、それは上辺だけの嘘ではない。実際に永一は涙ぐむ夫婦を前にして力になりたいと思っているし、犯人への強い怒りもあった。なのに、口を開こうとすると言葉が崩れ落ちてしまう。その結果、永一は二人が勝手に落ち着くのを待つだけだった。もともと親しみやすいとは言いがたい外見のせいもあって、永一はまるでその場の陰鬱な空気が凝固してできているかのような雰囲気を持っている。

児童誘拐殺害事件。夫婦はその被害者の両親だった。二人が異変に気付いたときの状況は、奇妙なものだった。朝になって子供が起きてこないで部屋まで呼びに行くと、そこには誰もいなかったというのだ。調べたところ、ちゃんとセキュリティは機能しており、不正にダウンさせた痕跡も見つからなかった。

聞き取りは隣に座った相方のウォルター・ブラウンが進めている。永一よりもずっと若く、まだ三〇歳にもならないくらいだ。彼は永一とは違い、堅苦しいが真摯な態度で被害者の言葉に耳を傾け、被害調書を作成している。意識しているわけではないだろうが、自然と両親もウォルターの方ばかりを見て話をしていて、無理もない。名前を名乗ったきり一言も口をきかない男になど、誰が好んで語りかけるだろうか。

言葉が永一の前を素通りしていく。やがて一通りの聞き取りが終了した。

「では、私達はこれで」

ウォルターの言葉に促され、永一は立ち上がる。両親が何か言う。相方が何か答える。どちらの声もひどく遠のいて聞こえた。だから、永一はウォルターの隣で会釈をすると、部屋を出た。少し遅れてウォルターも部屋から出てくる。見送りは、ない。

「お疲れ様です」

部屋を出たところでウォルターが言った。

「おう、お疲れさん。ま、俺は黙って座ってただけだがな」

崩れ落ちることなく、言葉が出てくる。いや、言葉はそもそも建物のように崩れ落ちたりするものではない。喋れないのは単純に自分のせいだ 永一は手短かに自分を責める。

「俺は、老人と子供には優しいんですよ。本当は少年課に行きたかったくらいで」

永一は苦笑すると、窓から通りの天井を見上げた。天井灯の輝きは、正午に近いことを示していた。

「それに、永一さんは聴くことに集中してくれれば、それでいいと思うんです。永一さんは俺が聴いてるより、ずっと多くのことを汲み取るじゃないですか。記憶力も凄いし」

永一は苦笑した。その記憶力のせいで、新米の頃は口ボというあだ名で呼ばれていたこともあったのだ。もっともそれは記憶力だけでなく、捜査中の体力や集めたデータから隠されている事柄を読みとる能力などもあってのことだった。永一自身にはそんな自覚はない

が、周囲からすれば生身を超えた性能を持っているように映るらしい。

無理やら努力やらしてるわけじゃないんだがな。自分に対して尊敬の目を向けるウォルターを前に、永一は内心つぶやいた。やりたいようにやった、それだけだ。

「そういえば、昼メシはどうします？」

「お前、行ってこい。俺はさっきの記録を整理する」

「でも、昨日の晩も何も食べなかったじゃないですか。そのまま泊まりで、朝だって」

「大丈夫だ」永一はそう言うと、ふと思いついたことを口にした。「あのな、俺がお前くらいの頃、なんて呼ばれてたか知ってるか？」

「いや、知らないです」

「口ボ、だ」

不適そうに笑ってみせると永一はウォルターと別れ、自分のデスクへ向かった。

午後いっぱい聞き込みを費やし、戻ってからもデータの整理と分析をしたりして、永一が徐々に帰宅したのはもう翌朝のことだった。永一の家はメゾネットタイプの、標準的な家族向けの間取りになっている。独身が一人で住むには広すぎる物件だが、実家なのだ。子供の頃は一家四人で生活していたのだが弟は留学先のウェールズでそのまま就職してしまい、両親は数十年かけて預金通帳の残高向上に死力を尽くし、そのかいあって信州の高級シニアホームへ引っ越してしまった。古びた室内はどこまでも静かで、仕事に疲れて帰ったときなどはよそよそしく感じられることさえあった。だが、そんな状況は二週間ほど前に一変した。同居人ができたのだ。

始まりは弟からの電話だった。多くの兄弟がそうであるように、永一たちも仲が悪くはないのだが、お互いに独立してからはすっかり疎遠になっていた。

モニター越しに見る弟の久一はすっかり様子が変わっていた。家庭的な生活が脂肪となって蓄積され、髪が薄くなっている。かつては流行にあわせていたはずの服装も、いまでは動きやすさと着心地、それに値段で選ばれていることが一目で判った。

「あ、兄さん？ 僕だよ。久一だ」

「久しぶりだな。一〇年ぶりくらいか？ もっとか。ずいぶん変わったな」

「そういう兄さんはあまり変わらないね」

「そうか？ そうかもな」

言いながらも、永一は違和感を感じた。久しぶりに話すからだろうか。ぎこちない空気。しかし、どちらもそんなことには気を遣わない。二人は微妙な距離感を埋める努力もしないまま、近況を述べあった。

「で、今日はどうしたんだ？」

会話が一段落したところで、永一は用件を促した。

「実は、頼みがあるんだ。その、娘を、ウェンディを預かってくれないか？」

永一は記憶を探る。実際に姪と会ったのはこれまでに一度きり。両親がシニアホームへ入るといので、弟一家が会いに来たときのことだ。その頃、姪ははまだ幼い少女だった。イギリス人の母親に似ていたが、髪は父親譲りの濃い黒だったことを憶えている。

その後も姪は折に触れ、信州の祖父母とやりとりを交わしているようだが、叔父である

自分のところへは何の連絡もなかった。そのことに不満はないが、おかげで名前も歳も思いつくことができない。顔立ちにしても、漠然とした印象のほかは何も出てこない。

永一の沈黙を悪い兆候だと思ったのか、久一は急に早口で説明を始めた。

「ウェンディは将来、日本と関わるような仕事がしたいって言うんだ。それで留学させてくれてねだられてさ。語学中心の留学プログラムもあるけれど、なにせウェンディは日本語も達人だからね。いっそのこと、日本の学校に転入させようかと。で、兄さんなら安心して娘のことを預けられると思うんだ」

「嫁さんはなんて言ってるんだ？」

「クリアかい？ クリアも日本びいきだからね。賛成してくれたよ」

「学校はどうするんだ？ こっちとそっちじゃカリキュラムが違うだろ」

それは予想済みのことだったらしく、久一はすぐに反応した。

「そっちには、生徒一人一人に合わせたカリキュラムを組んでくれる学校があるんだろ？」久一が言っているのは「ミックススクール」のことだった。学業の方はネットを介した完全個別授業で、カリキュラムは生徒に合わせて弾力的に決定される。一方で協調性や社交性、体育を含む体験学習は「クラブ」と呼ばれる地域ごとの組織が受け持っている。クラブは一〇人から二〇人ほどの部員と二名以上の教師から成り、常若市にも二つのクラブが存在した。

「けど、あれは金持ちのための制度で、高いぞ。お前、何とかいう会社でまだ研究してるんだよな？ 払えるか？」

「ロイヤル・ウィリアム・ビオティック・カンパニーだよ。まだあそこにいるけれど、今の役職は、えーと、日本語だとなんて言うんだろ。とにかくまあ、プロジェクトの取りまとめなんかをする立場でね。収入は多いと思うよ」

久一はそういうと、控えめな感じの笑みを浮かべた。昔から自慢となってしまうことを言う際に、よく見せる表情だった。他人から反感を買わずに済ませる、久一なりの手段なのだ。

「出世してたのか。おめでとう」

間抜けな言葉だと思いつつも、永一は感じたことを率直に言った。

「ありがとう」

久一も素直に受ける。

「ただ、俺は子供の面倒なんか見たことないだろ。急に預かって欲しいなんて頼まれてもなあ。それに、この仕事は帰りが不規則で……」

「兄さん、ウェンディはもう一七歳なんだ。自分の面倒は自分で見られるさ。むしろ、せっかく親元を離れるんだから、あまり世話を焼かれない方がいい経験になると思う。それでいて、刑事と一緒に住んでいればハメを外しすぎる心配はないし。それに」

「もういい。要するに、お前の所にとってはいいことづくめなんだな？」

聞いているうちに面倒臭くなり、永一は話を遮った。

「迷惑だろうとは思っているけれど、そこを何とか。生活費はちゃんと入れる。それにそっちに行けば時々父さんと母さんの所にも行けるだろ？ きっと二人とも喜ぶと思う」

永一は反論しようとして、急に面倒臭くなった。考えてみれば自分はほぼ家に帰らない。それなら姪を預かったところで、生活にたいした変化はないだろう。それよりも粘り強い

弟を諦めさせるため、延々と議論する方が大変だ。

「解った。その、ウェンディ、とはすぐに話せるのか？」

ため息混じりに尋ねる。娘と代わるため、久一の姿が速やかにフレームから消えた。

ディスプレイ越しに会話したのと同じ顔が、リビングの椅子に座ってトーストをかじっている。全体的に柔らかみのない、引き締まった顔だ。アッシュブルーの瞳や立体的な鼻梁といった面立ちの周りを、父親譲りの細い黒髪が取り巻いている。

トーストの表面に塗られているのは輸入食品店でウェンディが買って来たイギリス製のジャムだ。しかし、マグカップで湯気を立てているのは緑茶だった。

「あ、おはよう」

ウェンディの発音はまるっきり日本人だった。永一は「ああ」とも「おお」とも取れる返事をしながら、まっすぐ隣のキッチンスペースへ入る。目指す先には家族用の冷蔵庫。ドアを開けると、中はほとんど空だった。ところどころに食品のシミが付着している。それを目にするたび気にはなるのだが、掃除をするのは面倒に感じられてそのままになっていた。

永一は牛乳を取り出すと大きなマグカップへ九分目くらいまで注ぎ、冷蔵庫に戻した。それからマグカップを電子レンジに入れ、暖める。朝はいつもホットミルクだった。胃が弱く、起きてすぐは食べ物を受け付けられないのだ。すぐに電子音が鳴りレンジが止まる。マグカップを出すと、ほんのり暖まった取っ手が指になじむ。永一はその場に立ったまま、一口だけ牛乳を飲んだ。かすかに甘く、透明感のない味。満足そうに口の端が動く。

リビングに戻って椅子に座ると、向かい側のウェンディと目が合った。

「どうした？」

なんと言っているかわからず、永一は尋ねた。

「なんか伯父さんの動きって、本当に長いこと一人で暮らしてきた人って感じがする」

そう言うと、ウェンディは残っていたやや大きめのトーストを口に押し込んだ。それから口を少しだけ開けて、緑茶を流し込む。

永一はウェンディの発言の意図をつかもうとして、結果的に沈黙してしまった。

「ごめん。気を悪くした？」

トーストを飲み込んだウェンディは、少しだけ心配そうに言う。

気を悪くした、なんて普通は使わないよな。そんなことを思いながら永一は手に持ったままだったマグカップをテーブルに置いた。

「すまん。こういうのは慣れてなくて」

弁解しながら、永一は頭の中でそれを否定した。こういうもなにも、そもそも他人との会話全般が苦手なのだ。だが、そんなことはまだ知らないウェンディは、素直に申し訳なさそうな顔になった。

「ごめんね。迷惑かけちゃって。今日だって、徹夜だったんでしょ？」

「ああ、いや。ああ、いや、うーん」

謝られるとは予想していなかったため、永一は慌ててしまった。何かを言おうと思うのに、言葉が出てこない。

「でもね、人間いくつになっても新しいことにチャレンジするのは大切って言うしさ。前

向きに捉えてくれると嬉しいかな」

永一の狼狽には気付いていないのか、ウェンディはひどく生真面目な口調で言った。思わず永一は笑ってしまう。

「どうしたの？」

「いや、変なヤツだな」

「うん。たまに言われる」

「久一のヤツには似てない」

「伯父さんもね。伯父さんは怖そうに見える」

「ああ。たまに言われる。たいていは、怖いヤツだと思われたまんまだが」

今度は、ウェンディが笑う方だった。仕事を終えて帰ると誰かがいるという、久しく忘れていた感覚が永一の中で息を吹き返す。それはなかなか悪くなかった。

仮眠を取って署に出てみると、相方のウォルターが疲れ切った顔で席に座っていた。目は充血し、ヒゲがまばらに伸びている。背が低く、がっしりとした体格の永一とは違い、ウォルターはかなり背が高く、痩せている。三〇歳を前にやや髪が薄くなってきたことを本人は気にしているが、逆にそれがある種の親しみやすい雰囲気をもウォルターにつけ加えていた。

ウォルターはイギリス移民の二世だ。両親の故国には二回しか行ったことがないという。他にも常若市にはイギリスからの移民が多かった。ロンドンと姉妹都市関係を結んでおり、優先的にイギリスからの移住者を受け入れてきたためだ。常若市に限らず人口の減少を補うために、多くの都市が海外のどこかと密接な関係を結び、その住民を積極的に誘致している。

永一が隣の席に座ると、ウォルターは締まりのない声で言った。

「帰れませんでしたよ。ほら、三人くらい応援を頼んだでしょ？ こっちから頼んだ手前、先に帰るってわけにもいなくて……。終わる頃には八時回ってましたからね」

「寝たのか？」

「いちおう。ここでですけど。さっき起きたんです」

「だろうな」

「なんで判るんです？」

「目やにがついてる。顔洗ってこい。あと、俺が報告書に目を通してあるあいだに、メシ食ってきていいぞ」

ウォルターが部屋から出て行くのを見届けて、永一はパソコンの電源を入れた。その一瞬の操作でスイッチに内蔵されたセンサーが指紋を読みとり、薄く透明なディスプレイにデスクトップ画面が立ち上がる。永一はあくびを噛み殺しながらメーラーを立ち上げ、受信しているあいだにウォルターが作成した報告書へ目を通した。

報告書の見出しには「常若市児童誘拐殺害事件 保安情報中間報告書」と書かれている。それはいいのだが、なぜか血の滴る怪奇映画のようなフォントが使われていた。イギリス風のユーモアというよりは、徹夜で妙なテンションのせいだろう。永一はディスプレイでその部分をなぞると、画面の前で机に両手を下ろした。画面下のレンズから永一の手の下へ、キーボードの画像が投影される。同じ言葉を普通のフォントで打ち直すと、キー

ボードの右端にあるサークルを時計回りに指先でなぞり、ページをスクロールさせていった。

それは事件が起こった日から現在までのあいだに、街の各所へ設置されたカメラやセンサーが蓄えた膨大なデータを分析したものだ。それらは映像も音声も感圧センサーのデータも、すべてが「保安情報」という名目の元で調査に使用される。もちろん厳密な規定に沿っての利用となるのだが、犯人特定の重要な手がかりとなっている。都市によってはこうした行為そのものが禁止されている所もあるが、常若市は屋内都市という成立の背景から、常に「保安」や「安全」が優先されてきた。今や都市には独自の「価値観」を打ち出すことが求められているのだ。そのため、ある都市に住んでいるということは少なくとも行政がカバーする範囲においては誰もがおおむね似たような価値観を有していることを意味していた。

保安情報を分析する際、被害者の画像や音声によるパターンマッチングなどで明らかに意味がないと思われるデータは自動的に取り除かれる。それでも低解像度の動画や、清掃ロボットが方向転換する途中に映り込んだ一瞬の人影など、判断しきれないものは人間が確認することになる。

ウィリアムが話していた応援というの、このデータ分析のための要員だった。こうした体力仕事は若い署員に回ることが多く、そのたびに手伝ったり手伝われたり泊まり込みになることも多い。永一も若い頃は徹夜のまま聞き込みに出かけたものだった。

誤字脱字の多い報告書を読み進むうちに、ウォルターの力無い態度の理由が判った。すべてのデータを洗い出したわけではないものの、有益な情報が見つけれなかったのだ。

特に、第三被害者の遺体発見現場である空き家周辺を念入りに追ったようだが、死亡推定日時にその周辺を記録した映像には犯人や被害者の姿と思われるものが何もない。その地域を巡回している、市のメンテナンスロボットが集めたデータも同じだった。このままいけば少なくともデータの上では、犯人と被害者は別の場所から遺体発見現場へと瞬間移動したことになる。もちろん、そんなことはありえない。すると今度は、犯人と被害者がどうやって市内を移動したのか突き止めるという問題に取り組まなければならない。

報告書の誤字脱字を直したりメールをチェックしたりしていると、ウォルターが帰ってきた。

「いやあ、報道陣がけっこう来てますよ。さっそく沙宮さんが対応してました」

「出たがりだからな」

沙宮というのは、中堅の広報官だった。広報官は交通安全週間や防犯徹底キャンペーンなどの宣伝が主な仕事だが、まれに重大事件が起こればこうして報道関係者への窓口にもなる。

「そういえば、課長からのメール読みました？」

「来てるのは見た。中はまだ読んでない」

「昨日手伝ってもらった三人も正式に加わるそうです。そっちは引き続きここでデータの分析を。市内を巡回する警官も増やして、これ以上は犠牲者が増えないように努力するのかなんとか。僕らは変わらず外回りですけどね」

「ありがたいことだな」

常若市児童誘拐殺人事件。被害者は四歳の少女で、両親と共にイギリスから日本へやって来てまだ半年ほどしか経っていなかったという。絞殺だった。首の跡から殺害にはロープが使われたことはすぐに判明したが、後が続かなかった。手掛かりがないのだ。カメラとメンテナンスロボットなどから構成される監視網は市内のほぼ全域をカバーしているのに、そのどれにも犯人や被害者が記録されていなかった。いったいどうやって機械の目をくらましたのか。最新鋭の電子戦装備でもあれば別だが、特殊部隊でもあるまいし、普通の人間には無理だ。営利目的の大きかりな犯罪組織ならそうした物も揃えられるかもしれないが、そうすると今度は動機が判らなくなる。誘拐ならありえても、それを全員殺害してしまうことなど考えられない。カルト教団という線もなくはないが、そうした集団では逆に必要な装備が入手できないだろう。

ふとそこで、永一は「楡の木通り殺人事件」のことを思い出した。それは数十年前、都市の電子保安管理が成熟期に移行しつつあった頃、ある地方都市で起こった。楡の木通りと呼ばれる通りに面した家々で、子供たちが殺された事件だ。犯人は全身を火傷し、皮膚移植を受けた男だった。精神に異常を来しており、夢がどうのという支離滅裂な供述しかしなかったという。にもかかわらず男は、当時のレベルでは完全と思われた電子的な監視網を欺きながら、逮捕までに何人もの子供をその手にかけていた。

今回も似たような事件なのだろうか。その可能性を考えて永一は軽い不安を覚えた。いくら技術が進歩したとはいえ、完璧などありえない。ならば、やりようによっては個人でも現在の監視体制をすり抜けられるのかもしれない。だが、そんなことの起こる確率が数十年前よりもはるかに低いのは確かだ。

「目撃情報もあるにはあるんですが……」

役に立たないと言うのだろう。機械をごまかせるくらいなのだから、そうそう役立つ目撃情報など集まるはずがない。永一はすでにこの事件が厄介なものになることを予感していた。だが、まだ若いウォルターには焦る気持ちがあるのだろう。

これからどうするか話し合っていると、永一の端末が鳴った。

「もしもし」

「宇部さん？ 大守です。先ほど、所轄から連絡がありました。また、子供が。至急現場に……」

通話を終えると、気遣わしげに見つめるウォルターと目が合った。

「新しい被害者が出た。行くぞ」

現場は前回遺体が発見された場所から五キロほど離れた空き店舗だった。天井の高さは一フロア分しかなく、道幅は狭かった。人通りも少ない。同じ通りの店はその多くがシャッターを下ろしており、長いことそのままになっているようだった。

現場は慌ただしく、それでいて張りつめた悲哀に包まれていた。誰もが忙しく自分の仕事に没頭しているのだが、その全員が同時に殺された被害者を悼んでいる。永一とウォルターは入り口に立っていた警官のリーダーに手をかざして認識させ、中へと入った。

中ではすでに鑑識官たちが動き回っていた。方々で写真を撮ったりしている。元は飲食店だった室内の、カウンターの奥に遺体はあった。現場の指揮をしていた警官に断り、遺体を覆っていたプラマー製の布を持ち上げる。

遺体は生粋の日本人だった。本当に幼い。まだ四、五歳くらいの丸顔の男の子だ。目を固く閉じて何かに耐えるような顔をしている。そして、気道が潰れていた。

「死因はおそらく絞殺と思われます。簡易検査では九時間前に殺害され、ここへ運ばれたようです」

若い検察官が永一に告げた。感情を殺そうとしているが、子供が殺されたという事実への怒りが滲んでいる。

「なんでこんな……子供が」

ウォルターが言う。その声も怒りに震えていた。

「子供の身元は？」

「柴崎光。発見の一時間前に両親から捜索願が出されていきました。二人は現在、職員が本署へお連れしているところです。それと、先ほど三〇五が発令されました、現在市内の二七カ所で検問が張られています」

永一は報告してきた警官にうなずいた。

署へ戻るために二人が外へ出ると、既に報道陣が集まっていた。さっきまで署に居たはずの沙宮がここでも話をしている。二人はその脇を抜けると、パトカーへ乗り込んだ。

常若市の道は全て計画的に造られたにもかかわらず、やけに曲がりくねっている。眠気の防止や、スピード違反抑止のためだと言われているが、真偽のほどは定かではなかった。天候が存在しないせいで、通りへ面した店は正面の壁やドアがないものも多い。店内が外から丸見えになれば客も入りやすいし、それに何より防犯対策にもなるというのがそうした店の言い分だった。行政を黙らせるには「安全」「保安」を打ち出すのがもっとも効果的かつ効果的なのだ。もしそうした主張に耳を貸さなければ、議会は罷免される。

元は壁やドアがあったのに、わざわざそれを取り払ってしまった所もある。そうした店の大半は、建物と歩行者路との中間領域にまで商品を陳列している。これは法令違反なのだが数が多すぎる上に実害はないので、黙認状態となっていた。

やがて、辺りの天井の高さが二フロア分になった。人の姿も増え、あらゆる余白部分に埋め込まれたディスプレイがニュースや宣伝などを流し続けている。その中には永一たちが見てきたばかりの、新たな被害者のことも含まれている。

「いつも思うんですけど、永一さんって冷静ですよ」

先に口を開いたのは、ハンドルを握っているウォルターだった。

「いや、冷静なんかじゃない。犯人の野郎には、本当にムカついてるしな」

「そうは、見えないですよ」

「それは、俺が犯人を締め上げるのにどうすりゃいいか、知ってるからだ」

「どうするんです？」

「捜査に決まってるだろ」

「それだけだったら、みんな落ち着いてられますって。本当は、なんなんですか？」

永一は返事をしなかった。ウェンディが歩いているのを目にしたからだ。ウェンディは友人とのお喋りに夢中になっているようで、こちらへは気付いていないようだった。そういえば、今日はクラブの日だった。クラブハウスへ向かう途中なのだろう。

「どうしたんですか？」

「いや、何でもなし。ちょっと知り合いを見かけたような」

「戻ります？」

「いい」

永一は首を軽く反らせ、ヘッドレストに頭を預けると目を閉じた。そうしていると、初めて見るウェンディの屈託ない笑顔と殺された子供たちの顔とが微妙に入り交じりながら、いつまでも眼裏にちらついた。